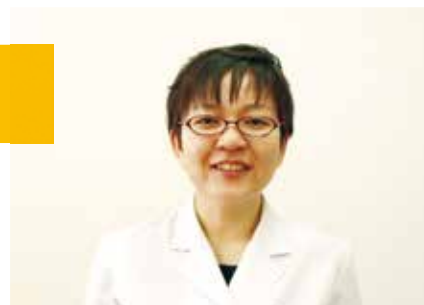


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第18回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



薬局薬剤師は、自分の存在が社会にとって有益であるとPRしてこなかった。「不言実行」は日本人の美德ではあるが、その言葉に甘えているうちに、だんだん「不言実行」になっていったのかもしれない。このまま、自ら考え、提案し、状況が改善したというアウトカムを提示する義務を怠れば、薬剤師を取り巻く環境は悪化するしかないのではないか？

*

「薬局薬剤師は、処方せんを薬に換えてくれる人。患者さんの家にわざわざ来て、何ができるの？ 払うお金に見合う何かをしてくれるの？」。在宅訪問業務を始めてすぐのころ、たくさんの人に言われた。「いいえ、こんなにメリットがあるんです」と説明する一方で、私たちの職種はアウトカムがないのだと、しみじみと思い知らされた。

待っているだけでは、環境は変わらない。自分から変えていかなければならない。そう決心して、最初にかかったのは学会発表だ。目的—方法—結果—考察にいたる客観的な検証で、自分の仕事を表現する癖をつけようとした。だが、難易度は高く、症例発表に甘んじた。もっときちんと医療的、医療経済的なアウトカムを示せるようになりたい。できれば——病院薬剤師たちのように——コンスタントに学会発表をしながら、現場に成果を還元したい。

どうすれば、より良い学会発表ができるのかを考えた末、ほかの人の発表時にも「自分がやるなら——」と想像しながら聞くようにした。すると目線を大きく変えられるようになった。やがて、人見知りなどと言いわけ

ず、素晴らしい人たちと積極的にコミュニケーションをとって糧にしようとする姿勢も生まれた。

そうして四苦八苦しながらアカデミックに自分の仕事をとらえようと努力をしていると、さらなる課題が見えてきた。社会に訴えるには「症例報告」や「発表」だけでなく、「論文」が必要だ。尊敬する人たちの井戸端会議の声からわかってきた。なるほど、そうか。

しかし、長年さぼっていたぶん、ハードルは高い。比較対照群をつくりにくい現場で、仕事の質の有意差判定はどんなかたちでできるのか、まだまだ考えはまとまらないし、統計の知識もまったくもって足りない。だが、できないと諦めてしまえば、結局、薬局薬剤師は自己満足の仕事しかしていないとされ、淘汰されるべき職種というカテゴリーから脱せないのではないか。

*

現場が忙しいと、つい自己研鑽をあとまわしにしてしまいがちだ。あるいは、ルーティンで仕事がまわせてお金をもらっているならば、精進そのものの必要性を感じなくなってしまうかもしれない。でも、薬局の「外」は大きく変動している。情報化社会で医療情報が氾濫している中、探し方さえ上手であれば、国家資格を持たなくてもそれなりの根拠ある医療情報の閲覧は可能で、エビデンスをもとに一般人でもアセスメントを行える。医師の処方せんとおりに調剤をし、自分ではなんのアセスメントもせず薬を渡すことは、特別な職権を与えられた層が行うべき仕事だろうか。

地域住民の生活に根ざした薬の専門家——あるべき論はもう十分。私たちにはアウトカムが求められている。